

生活行動の視点に基づく消化管術後患者の離床を促進する看護モデルの開発

著者	加藤木 真史
学位名	博士（看護学）
学位授与機関	聖路加国際大学
学位授与年度	2016
学位授与番号	32633甲第163号
URL	http://doi.org/10.34414/00013756



氏 名：加藤木 真史
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 163 号
学位授与年月日：2017 年 3 月 10 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文審査委員：主査 吉田 千文（聖路加国際大学教授）
副査 菱沼 典子（聖路加国際大学教授）
副査 中山 和弘（聖路加国際大学教授）
副査 井上 智子（国立看護大学校大学校長）

論文題目：生活行動の視点に基づく消化器術後患者の離床を促進する看護モデルの開発

博士論文審査結果

術後の離床効果は既に立証され、術後管理の基本として看護師による離床援助がおこなわれている。しかし「歩行」促進が中心であり、病者が手術によって中断した生活を早期に取り戻すという視点にたった援助にはなっていない現状がある。またこの生活者の視点での離床援助方法については研究されていない。

本論文は、消化管術後患者に対する離床ケアについて、生活行動の視点に基づく離床ケアプログラム（以下、「生活行動促進ケア」）を開発し、その効果を歩行に焦点をあてた離床ケア（以下、「歩行促進ケア」）との比較によって検証し、離床を促進する看護モデルを開発することを目的としている。

「生活行動促進ケア」は、研究者が文献検討、術後患者及び看護師の観察と面接をもとに構築した「消化管術後患者の離床促進ケアモデル」に基づいて作成された。「歩行促進ケア」との主な違いは、生活行動促進に向けた術前教育、術後ベッドから起きて使用する道具の準備、および術後に 3 日目まで日々行われる患者との生活行動の離床目標の設定等などである。

研究デザインは「歩行促進ケア」群と「生活行動促進ケア」群の 2 群の差を比較する準実験研究で、「歩行促進ケア」を行っている 1 病院 1 病棟において、「歩行促進ケア」群のデータ収集後、「生活行動促進ケア」を病棟のケアとして導入する期間を経て、「生活行動促進ケア」群のデータ収集が行われた。

結果には「歩行促進ケア」群 23 人、「生活行動促進ケア」群 19 人の群間比較分析において、後者は患者がとった生活行動の種類が多く、酸素投与終了までの時間が短いことが示された。また、『周囲の出来事に関心がもてた』『自分らしく一日を過ごせた』について術後日数と介入による交互作用を認め、生活行動促進ケア群でその変化が大きいことが示された。そして群間比較と共分散構造分析の結果より、「消化管術後患者の離床を促進する看護モデル」が構築された。このモデルでは、消化管術後患者に対する「生活行動促進ケア」は、術後早期から生活行動を再開する中で離床を可能とし、<身体機能の回復><からだが楽になる><自分を取り戻す>をもたらすことで<回復を実感する>を促進することが示された。

審査では、生活の視点に立った周手術期の看護援助の重要性を実証的に示したことについて独創的で新規性のある研究と評価された。また研究者が自身の経験に基づく問題意識を段階をおって粘り強く探求し続けたこと、病棟チームと協働的に実施したことについて高く評価された。

次の点が指摘され、修正が求められた。

1. 離床の定義に端坐位を含む根拠について明確な説明を加えること。
2. 介入は多様な業務が行われている病棟において病棟看護師によって行われている。属性バイアス、選択バイアスを念頭に置いて介入内容及び介入が行われた病棟の状況について

て丁寧に記述し、結果を解釈すること。

3. 属性バイアスの観点から、両群間に有意差があった術式について、腹腔鏡手術のみの分析結果を追記すること。

4. 生活行動促進ケア群において、歩行のみを目標とした患者については、病棟看護師によるケアが行われているか不確実である。歩行だけでなく生活行動の目標を設定した患者に限定し、2群間比較分析を追加すること。また普及のための課題を考察に加えること。

5. 臨床での適用のために、看護師が何を行うことが生活行動の促進になるのかを、共分散構造分析の結果を含めて明確に示すこと。

これらの点について、追加分析及び加筆が行われ、審査員全員が適切に修正されたことを確認した。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。